

# 上級ミクロ経済学：試験の解答

川崎 雄二郎\*

2009年6月10日

1. (a) 初めに,  $x \succ y$  を満たす  $(x, y) \in \mathbf{R} \times \mathbf{R}$  を求める. 定義により,  $x \succ y$  は  $x \succsim y$  かつ  $y \not\prec x$  を意味するので, 以下と同値である.

$$\begin{aligned}x + 1 &\geq y, \\ y + 1 &< x.\end{aligned}$$

ゆえに, 任意の  $(x, y) \in \mathbf{R} \times \mathbf{R}$  について,  $x > y + 1$  のとき, かつそのときのみ,  $x \succ y$  を満たす.

次に,  $x \sim y$  を満たす  $(x, y) \in \mathbf{R} \times \mathbf{R}$  を求める. 定義により,  $x \sim y$  は  $x \succsim y$  かつ  $y \succsim x$  を意味するので, 以下と同値である..

$$\begin{aligned}x + 1 &\geq y, \\ y + 1 &\geq x.\end{aligned}$$

ゆえに, 任意の  $(x, y) \in \mathbf{R} \times \mathbf{R}$  について,  $|x - y| \leq 1$  のとき, かつそのときのみ,  $x \sim y$  を満たす.

- (b)  $\succ$  は transitive である. 実際,  $x \succ y$  かつ  $y \succ z$  なる  $x, y, z \in \mathbf{R}$  を任意にとると,

$$\begin{aligned}y &< x - 1, \\ z &< y - 1\end{aligned}$$

なので,

$$z < y - 1 < x - 2 < x - 1$$

より,  $x \succ z$  が成り立つ.

一方,  $\sim$  は transitive ではない. 実際,  $(x, y, z) = (0, 0.75, 1.5)$  のとき,

$$\begin{aligned}|0 - 0.75| &= 0.75 \leq 1, \\ |0.75 - 1.5| &= 0.75 \leq 1\end{aligned}$$

なので  $x \sim y, y \sim z$  であるが,

$$|0 - 1.5| = 1.5 > 1$$

より  $x \not\sim z$ .

---

\* 京都大学大学院経済学研究科博士後期課程1年. 質問は jiro\_likes\_1a2s3k@msn.com までメールください.

2. (a)  $x$  の  $w$  に関する 1 次同次性から , 任意の  $(p, w) \in \mathbf{R}_{++}^L \times \mathbf{R}_{++}$  ,  $\alpha > 0$  について ,

$$x(p, \alpha w) = \alpha x(p, w)$$

が成り立つので , 両辺を  $\alpha$  について微分して  $\alpha = 1$  で評価すると

$$D_w x(p, w) w = x(p, w) .$$

ゆえに ,

$$D_w x(p, w) = \frac{1}{w} x(p, w) .$$

(b) Slutsky equation により , 任意の  $(p, w) \in \mathbf{R}_{++}^L \times \mathbf{R}_{++}$  について , 以下が成り立つ .

$$D_p x(p, w) = D_p h(p, v(p, w)) - D_w x(p, w) x(p, w)^T .$$

$D_p h(p, v(p, w))$  は対称かつ negative semi-definite であり , また (a) の結果から

$$D_w x(p, w) x(p, w)^T = \frac{1}{w} x(p, w) x(p, w)^T$$

より , 任意の列ベクトル  $v \in \mathbf{R}^L$  に対し ,

$$\begin{aligned} & v^T \left( D_w x(p, w) x(p, w)^T \right) v \\ &= \frac{1}{w} v^T x(p, w) x(p, w)^T v \\ &= \frac{1}{w} \left( x(p, w)^T v \right)^2 \geq 0 \end{aligned}$$

なので  $(x(p, w)^T v \in \mathbf{R}$  に注意) ,  $D_w x(p, w) x(p, w)^T$  は対称かつ positive semi-definite である . したがって  $-D_w x(p, w) x(p, w)^T$  は対称かつ negative semi-definite なので ,  $D_p x(p, w)$  は対称かつ negative semi-definite .

3. (a)  $u^1 = v(p^1, w)$  ,  $u^0 = v(p^0, w)$  とすると ,

$$\begin{aligned} & CV(p^0, p^1, w) + EV(p^1, p^0, w) \\ &= e(p^1, u^1) - e(p^1, u^0) + e(p^1, u^0) - e(p^1, u^1) \\ &= 0 \end{aligned}$$

が成り立つ .

(b) まず初めに , 任意の  $p^0, p^1, p^2$  及び  $w$  について ,  $EV(p^0, p^1, w) \geq EV(p^0, p^2, w)$  と  $v(p^1, w) \geq v(p^2, w)$  が同値であることを示す .  $i = 1, 2, 3$  に対し  $u^i := v(p^i, w)$  とすると ,

$$\begin{aligned} & EV(p^0, p^1, w) \geq EV(p^0, p^2, w) \\ & \iff e(p^0, u^1) - e(p^0, u^0) \geq e(p^0, u^2) - e(p^0, u^0) \\ & \iff e(p^0, u^1) \geq e(p^0, u^2) \end{aligned}$$

が成り立つ . 支出関数  $e$  は効用水準  $\bar{u}$  に関して非減少関数であることから ,  $u^1 \geq u^2$  ならば

$$e(p^0, u^1) \geq e(p^0, u^2)$$

を得る。逆に  $e(p^0, u^1) \geq e(p^0, u^2)$  のとき、 $e$  が  $\bar{u}$  に関して厳密な増加関数ならば  $u^1 \geq u^2$  が成り立つ。実際、 $e$  は効用水準  $\bar{u}$  に関して非減少関数なので、 $e(p^0, u^1) > e(p^0, u^2)$  ならば  $u^1 > u^2$  である。あとは  $e(p^0, u^1) = e(p^0, u^2)$  ならば  $u^1 = u^2$  であることを示せば十分。これについては、

$$h(p^0, u^1) = x(p^0, e(p^0, u^1)) = x(p^0, e(p^0, u^2)) = h(p^0, u^2)$$

なので、効用関数の continuity と strict monotonicity により、 $u^1 = u^2$ 。

次に、一般性を失うことなく、 $\succsim$  が第 1 財に関して準線形であるとする。このとき、任意の  $p^0, p^1, p^2$  及び  $w$  について、 $p_1^0 = p_1^1 = p_1^2$  ならば  $CV(p^0, p^1, w) \geq CV(p^0, p^2, w)$  と  $v(p^1, w) \geq v(p^2, w)$  が同値であることを示す。準線形性により、任意の  $p, p' \in \mathbf{R}_{++}^L$  及び  $\bar{u}, \bar{u}' \in \mathbf{R}$  において

$$\frac{e(p, \bar{u}') - e(p, \bar{u})}{p_1} = \frac{e(p', \bar{u}') - e(p', \bar{u})}{p'_1}$$

が成り立つ。ゆえに、 $p_1 = p'_1$  であれば

$$e(p, \bar{u}') - e(p, \bar{u}) = e(p', \bar{u}') - e(p', \bar{u})$$

である。すなわち、

$$\begin{aligned} EV(p^0, p^1, w) &= e(p^0, u^1) - e(p^0, u^0) \\ &= e(p^1, \bar{u}^1) - e(p^1, \bar{u}^0) \\ &= CV(p^0, p^1, w), \end{aligned}$$

さらに

$$EV(p^0, p^2, w) = CV(p^0, p^2, w)$$

が成り立つことから、前半の議論により  $CV(p^0, p^1, w) \geq CV(p^0, p^2, w)$  と  $v(p^1, w) \geq v(p^2, w)$  は同値である。

4. (a) 結果のみ示す。

$$\begin{aligned} z_1(w, q) &= \frac{\partial c}{\partial w_1}(w, q) = \frac{w_2^2 q^2}{4(4w_1 + w_2)^2}, \\ z_2(w, q) &= \frac{\partial c}{\partial w_2}(w, q) = \frac{w_1^2 q^2}{(4w_1 + w_2)^2}. \end{aligned}$$

(b) 生産可能集合を  $Y$  とし、生産財の価格を  $p > 0$  とする。任意の  $\bar{y} \in Y$  に対し

$$\begin{aligned} w_1 \bar{y}_1 + w_2 \bar{y}_2 + p \bar{y}_3 &\leq p \bar{y}_3 - w_1 z_1(w, \bar{y}_3) - w_2 z_2(w, \bar{y}_3) \\ &= p \bar{y}_3 - \frac{w_1 w_2 \bar{y}_3^2}{4(4w_1 + w_2)} \end{aligned}$$

が成り立つので、 $p$  の下での利潤最大化問題は以下の最大化問題に置き換えられる：

$$\max_{q \in \mathbf{R}_+} pq - \frac{w_1 w_2 q^2}{4(4w_1 + w_2)}.$$

この問題の解を  $s(p)$  とすると、利潤最大化解、すなわち供給関数  $y(p)$  は  $y(p) = (-z_1(w, s(p)), -z_2(w, s(p)), s(p))$  によって与えられる。目的関数が  $q$  について凹関数であるので、利潤最大化の一階の必要条件から、供給関数を  $s: \mathbf{R}_{++} \rightarrow \mathbf{R}_+$  とすると

$$p - \frac{w_1 w_2 s(p)}{2(4w_1 + w_2)} = 0$$

が任意の  $p > 0$  において成り立つ。ゆえに、

$$s(p) = \frac{2(4w_1 + w_2)}{w_1 w_2} p.$$

したがって、

$$y(p) = \left( -\frac{p^2}{w_1^2}, -\frac{4p^2}{w_2^2}, \frac{2(4w_1 + w_2)}{w_1 w_2} p \right).$$

5. (a)  $u$  は絶対的リスク回避度が一定であるから、任意に固定した  $\alpha \in \mathbf{R}_{++}$  に対し、効用関数  $x \mapsto u(x)$  と  $x \mapsto u(x + \alpha)$  は同程度にリスク回避的である。したがって、

$$\begin{pmatrix} 10 & 30 \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2} \end{pmatrix} \sim \begin{pmatrix} 18 \\ 1 \end{pmatrix}$$

ならば、

$$\begin{pmatrix} 10 + \alpha & 30 + \alpha \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2} \end{pmatrix} \sim \begin{pmatrix} 18 + \alpha \\ 1 \end{pmatrix}$$

が成り立つ。ゆえに、

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} 20 & 40 \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2} \end{pmatrix} &= \begin{pmatrix} 10 + 10 & 30 + 10 \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2} \end{pmatrix} \\ &\sim \begin{pmatrix} 18 + 10 \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 28 \\ 1 \end{pmatrix}. \end{aligned}$$

したがって、 $x = 28$  のときに成り立つ。

(別解) 任意の  $x \in \mathbf{R}_{++}$  について  $t(x) = \frac{1}{\lambda}$  であるとする(ただし、 $\lambda > 0$ )。このとき、 $u$  はある  $(A, B) \in \mathbf{R}_{--} \times \mathbf{R}$  によって

$$u(x) = Ae^{-\lambda x} + B, \forall x \in \mathbf{R}_{++}$$

と表わされる。仮定により、

$$\frac{1}{2}e^{-10\lambda} + \frac{1}{2}e^{-30\lambda} = e^{-18\lambda}$$

が成り立つので、

$$\begin{aligned} \frac{1}{2}u(20) + \frac{1}{2}u(40) &= A \left( \frac{1}{2}e^{-20\lambda} + \frac{1}{2}e^{-40\lambda} \right) + B \\ &= e^{-10\lambda} A \left( \frac{1}{2}e^{-10\lambda} + \frac{1}{2}e^{-30\lambda} \right) + B \\ &= e^{-10\lambda} A \cdot e^{-18\lambda} + B \\ &= Ae^{-28\lambda} + B. \end{aligned}$$

ゆえに,  $x = 28$  のときに成り立つ.

(b)  $x \in \mathbf{R}_{++}$  を任意にとる.  $x$  における絶対リスク許容度の弾力性を  $e(x)$  とすると,

$$\begin{aligned} e(x) &= t'(x) \cdot \frac{x}{t(x)} \\ &= -\frac{(u''(x))^2 - u'(x)u'''(x)}{(u''(x))^2} \cdot \left(-\frac{xu''(x)}{u'(x)}\right) \\ &= \frac{(u''(x))^2 - u'(x)u'''(x)}{u''(x)} \cdot \frac{x}{u'(x)} \end{aligned}$$

であるので,

$$\begin{aligned} e(x) &\geq 1 \\ \iff \frac{(u''(x))^2 - u'(x)u'''(x)}{u''(x)} \cdot \frac{x}{u'(x)} &\geq 1 \\ \iff \left((u''(x))^2 - u'(x)u'''(x)\right)x - u''(x)u'(x) &\leq 0 \\ \iff (u''(x) + xu'''(x))u'(x) - x(u''(x))^2 &\geq 0 \end{aligned}$$

が成り立つ. ここで,

$$\frac{d}{dx} \left(-\frac{xu''(x)}{u'(x)}\right) = -\frac{(u''(x) + xu'''(x))u'(x) - x(u''(x))^2}{(u'(x))^2}$$

であるから,

$$e(x) \geq 1 \iff \frac{d}{dx} \left(-\frac{xu''(x)}{u'(x)}\right) \leq 0$$

が成り立つ.